

本が死ぬところ 暴力が生まれる バリー・サンダース著

評者・馬場 錬成（本社論説委員）

若者を中心に本離れが急増している。この一ヶ月間、本を全く読まなかつた人は半数を超えていた。こんなニュースに接した後、この刺激的なタイトルのついた本書を読んでみると、活字文化の衰退の影響の重大さと、活字離れの原点がどこにあるのか、深く考えさせられる。

本書では、最近アメリカで起きた若者の粗暴事件の例をひいて説き起こしているが、本質的には日本による小学生惨殺事件、日常的に発生している青少年の非行事件である。こうした事件の背景にはテレビ、ゲーム、劇画などの影響をあげ、ナイフの販売自粛、生徒の服装の点検、所持品検査の強化などが言わされた。

自己形成としての 識字文化を検証

しかし本書は、問題の所在はそんなどころにあるのではないと主張する。字を識ること（識字）、本を読むことは自己の認識であり、自己の形成につながるものだ。識字文化は「人が内化し、経験へと移しもどすダイナミックな体系」であるとする。読み書きの技術を失うことによって、自己が喪失していくことが問題なのだと説く。

テレビやゲームなどの電子機器が、活字文化を妨害するから規制するという短絡的な思考ではだめだ。もっと根本的な、言語・思想の視点から考えをめぐらそうと提言する。識字文化への原点とも言うべき「承世界の経験（たとえば赤ちゃん時代に母親

から聞かされる寝物語がそうだ）や、遊び心を持つ口承文化の重視が大切だと主張する。それは人間の「声」と「言葉」の復権でもある。

学術的な検証が織り込まれているので、立ち止まることがあるが、巻末にある訳者の「あとがき」が本書の内容を簡潔に整理してくれる。訳者もそうしたが、まず「あとがき」を読んでから読み始めると著者の主張点がいつそう明確に伝わってくる。杉本卓訳。（新曜社、2850円）

△B・サンダース＝米カリスマ
ルニア州のピツァー・カレッジの
英語、思想史の教授。共著に『ABC—民衆の知性のアルファベ
ット化』（岩波書店）。

